

留学生と日本人学生の友人形成に至る交流体験とはどのようなものか

—多文化交流合宿3か月後のインタビューから—

小 松 翠

1. 問題の所在と先行研究

1.1. 異文化間交流の重要性

留学生にとってのホスト住民との交流の重要性 日本の大学等の高等教育機関に在籍する留学生数は2010年、過去最高の141,774人となった。2013年現在はリーマンショックや東日本大震災の影響（加賀美・小松, 2013）により135,519人に微減したが（日本学生支援機構, 2012）、30年前の1983年には10,000人程度の留学生しか在籍しておらず、30年間で約13倍に急増している。

留学生の増加に伴い、留学生と受け入れ側のホスト住民との接触や交流に焦点を当てた研究が蓄積されてきている。例えば、加賀美（2007）は留学生の抱える問題として日本人との対人関係について述べている。加賀美（2007）によるとこの問題は、経済的問題や住居問題といったマクロレベルの問題と日本語学習やメンタルヘルスの問題といったミクロレベルの問題の両方と関連するメゾレベルの問題である。また、海外の研究ではBrislin（1981）は異文化適応の中心概念を示し、ホスト国の住民と良好な関係を持つことの重要性を示唆している。異文化適応とは、異文化滞在者が滞在中の目標を達成することができ、ホスト社会において自分の居場所を見出すことを意味する。その中心概念は、第一に「個人の満足」、第二に「強度のストレスがなく日常生活が機能していること」、第三に「ホスト社会の人々から受け入れられていること」である（Brislin, 1981）。

留学生にとっての日本人学生との交流の重要性 留学生にとっては、ホスト住民のなかでも日常的に接する日本人学生との関係は重要だと考えられる。留学生と日本人学生の対人関係構築の重要性や効果に関する先行研究は数少ないが、日本人学生を対象とした同文化間の友人関係の研究において、その効果が指摘されている。例えば、高木（2007）は日本人学生のうち、友人への自己開示の程度が低い者ほど孤独感が強いことを示した。また、木村・水野（2004）は日本人学生の被援助志向性について分析し、対人社会面、心理・健康面、修学・進路面の問題領域において、学生相談への被援助志向性よりも友人・家族への被援助志向性のほうが高い傾向を示した。これらの効果は日本人大学生と同様に青年期にある留学生においても共通していると考えられる。

しかし、留学生は異文化間環境に置かれ、サポート資源が少ない（加賀美, 2007）ため、友人がいなければ日本人学生よりもさらに孤立した状態に置かれると推測できる。上述のように先行研究は少ないが、留学生を対象とした異文化適応に関する調査では、適応の要因として日本人学生や他の留学生との良好な友人関係構築が重要であること（中川・神谷, 2000；園田, 2011）が指摘されている。

日本人学生にとっての留学生との交流の重要性 異文化間交流の促進は留学生のみではなく日本人学生

に対しても、国際的視野を持ち自己成長を遂げるのに有効である（坪井，1999；神谷・中川，2002）。横田（2013）は、日本人学生のうち留学生の友人を多く持つ者は海外留学や国際的仕事への関心が強く、留学生受入れにも肯定的であることを示した。また、神谷・中川（2002）は、留学生と日常的な交流のある日本人学生は交流のない者よりも大学への適応が良好な傾向があることを示している。

1.2. 留学生と日本人学生の異文化間交流の問題

しかし、大学キャンパスにおける異文化間交流には問題が山積している。例えば、大学内での異文化間交流の機会が少なく（藤井・門倉，2004）、留学生・日本人学生ともに自国の友人との交流頻度のほうが高いこと（戦，2007；木村・中込，2003）が報告されている。また、横田（1991a）は日本人学生・留学生ともに同国の友人に対してより深く自己開示する傾向を示している。さらに、中野（2006）は留学生と日本人学生の相互理解が促進されない原因として、留学生がホスト国において偏見や差別を敏感に感じ日本人との接触に萎縮してしまうこと、日本人学生に異文化を受入れ留学生との個別な友人関係を築く用意がないことを挙げ、促進のためには大学内に国際理解教育プログラム等の異文化接触場面を設定することが必要だと述べている。つまり、自然な状態では留学生同士、日本人学生同士の友人関係にとどまる傾向にあるため、大学側の異文化間交流促進の働きかけや環境づくりが重要だと考えられる。

1.3. 異文化間交流を促進するための条件と教育的介入

接触仮説 異文化間交流についての示唆を与える理論的枠組みとして、Allport（1954）の接触仮説が挙げられる。同仮説によると、どのような種類の接触でも集団に対して好意的な感情をもたらすわけではなく、ある一定の条件を満たした接触でなければ集団接触は効果的に行われぬ。その条件とは、第一に「対等な地位関係」、第二に「共通の目標を持つ協働」、第三に「社会的制度的な支持」、第四に「親密な接触」である。同仮説は後続の研究においても中核とされ（Pettigrew・Tropp，2006）、上述の4条件に新たな条件を加えている研究もある。例えば、Pettigrew（1998）は五つ目の条件として、接触状況において友情を育てる機会があることを付加している。

間接的接触仮説 Wright・Aron・Mclaughlin（1997）は接触仮説をもとに間接的接触仮説を提唱し理論化した。同仮説によると外集団成員の友人を直接持たなくても、他の内集団成員が外集団成員と友好的関係を築いていると認識するとその外集団に対して肯定的意識を持つ。間接的接触の効果に関する研究には、Eller・Abrams・Zimmermann（2011）のイギリス滞在の留学生の友人に関する研究がある。同研究では、留学生の友人のうち、留学生の母国在住で、イギリス人との直接接触を持たない者を対象とし調査を行った。その結果、対象者のうち、留学生からの伝聞を通して留学生がイギリスの人々と好意的な接触をしていると認識する者は、イギリス人を好意的に評価することが示された。つまり、集団レベルでの交流が友好的に行われることが異文化間交流において重要であると考えられる。

教育的介入 異文化間交流の問題を改善するための取り組みとして、教育的介入（加賀美，2001；加賀美，2006a）が挙げられる。教育的介入とは「一時的に不可避な異文化接触を設定し、組織と個人を刺激し学生の意識の変容を試みる行為」のことである。これは、個人及び個人の所属する環境の双方に望ましい相互作用を促すコミュニティ心理学の概念をもとに理論化されている。教育的介入の実践例には、日本人学生と留学生の共同学習を促進させる参加体験型の交流授業や異文化間交流グループの活動支援などがある（加賀美・小松，2013）。その効果については、例えば加賀美（2006b）は交流授業における討論等によりグループ内でのコミュニケーションが促進され、人間関係がより親密になったことを報告してい

る。このように、Allport(1954)らの指摘する接触仮説の条件を揃えた環境の整備や教育的介入が有効であることが示されている。

1.4. 留学生と日本人学生の国際教育交流シンポジウムの先行研究

本研究では、お茶の水女子大学で実施されている「留学生と日本人学生の国際教育交流シンポジウム」(以下、多文化交流合宿とする)における留学生と日本人学生の友人形成に至る交流体験について検討する。加賀美(2006a)は2002年度第1回多文化交流合宿で実施された教育的介入は参加者の多文化理解態度の観点からどのように効果があるか検討している。第1回多文化交流合宿で行われた教育的介入は、異なる文化や価値観への気づきを促すための異文化シミュレーション・ゲーム(加賀美, 2006a)とグループ討論である。同研究では多文化交流合宿の効果として日本人学生・留学生双方の「創造性」、「共感性」、「協働性」、「相手文化尊重」、「寛容性」、「多文化尊重」、「曖昧性への忍耐」の態度が意識化され、多文化理解の認識が深まっていることが示された。

また、小松(2013)は国際交流グループTEAに参加している留学生と日本人学生のメンバーを対象に交流活動に対する印象を分析し、多文化交流合宿に参加した経験は友人形成のきっかけとして認知される傾向を示した。なお、国際交流グループTEAの詳細については後述する。以上より、多文化交流合宿は留学生と日本人学生の多文化理解を促進し、友人形成の一翼を担うものとして機能していると考えられる。

2. 研究目的

研究1：多文化交流合宿における教育的介入については先述の加賀美(2006a)により、2002年度第1回多文化交流合宿での教育的介入の効果は示されているが、それ以降の多文化交流合宿における効果は検討されていない。そこで、10年後の2012年度第11回多文化交流合宿における教育的介入が留学生と日本人学生の友人形成にどのように効果があるか検討を行うこととする。

研究2：多文化交流合宿の参加者はどのような交流体験によって友人形成に至るのか、詳細は明らかになっていないため、留学生と日本人学生が友人形成に至る交流体験はどのようなものか検討を行うこととする。また、友人形成に至る交流体験に関連する要因はどのようなものか検討を行うこととする。

研究3：多文化交流合宿後の継続した交流については検討が行われていない。そこで、2012年度第11回多文化交流合宿3か月後、留学生と日本人学生の交流は継続しているどうか確認し、継続する場合、関連する要因はどのようなものか検討を行うこととする。

3. 方法

3.1. 多文化交流合宿と国際交流グループTEAの概要

多文化交流合宿の概要 多文化交流合宿は接触仮説や教育的介入の理論を基盤とし、多文化間交流の促進を企図してプログラムされている(加賀美・小松, 2013)。同合宿の準備については、担当教員やグローバル教育センターの支援のもと、国際交流グループTEAのメンバーの学生が中心となり行われている(図1)。

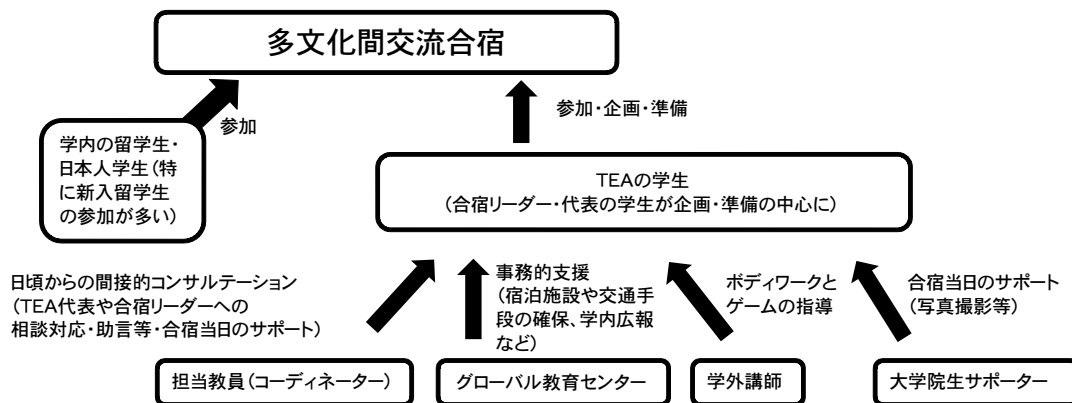


図 1. 多文化交流合宿の支援者と参加者

参加者は学内の学生から募集しており、新入留学生の参加も多い。合宿当日は学外講師によるゲームやボディワークの指導、大学院生による記録撮影等の作業が行われている。

第11回多文化交流合宿の概要 第11回多文化交流合宿は2012年11月に行われた。多文化交流合宿の活動には多様な企画が織り込まれ各々異なる特徴がある。主な活動は表1の通りで、1つ目のボディワークとゲームは学外講師の指導のもと参加者全体で行われ、緊張を和らげるアイスブレイキングの機能を持つ。2つ目のグループ討論は担当教員（コーディネーター）が設定したもので、合宿前に行う討論の事前準備及び合宿当日の討論とプレゼンテーションの準備は参加者のみで行われる。3つ目の自由時間は緊急時の対応を除き交流支援者の介入はなく、任意の交流活動が行われている。

国際交流グループTEAの概要 国際交流グループTEA（以下、TEAとする）は2002年にお茶の水女子大学に設立されており、正式名称はTranscultural Exchange Association（加賀美，2001）である。主

表 1. 多文化交流合宿における主な活動の特徴

活動(交流)	プログラムされた活動	活動例など	交流支援者と学生の関わり方	活動時間
ボディワークとゲーム(全体)	ゲーム、リラクゼーション等のエクササイズ	仲間作りゲームや自己紹介ゲームなど	・プログラムの設定は交流支援者による ・交流支援者（学外講師）が指導	2時間
グループ討論会(集団)	留学生と日本人学生の合同グループによる討論と翌日のプレゼンテーション	グループ毎にテーマに基づき、出身地域・出身国の文化や社会事情等について討論し、プレゼンテーションを行う	・プログラムの設定は交流支援者（担当教員）による ・事前準備やグループ討論は学生のみで行う ・討論の内容などについては交流支援者は指導等は行わず、プレゼンテーションの際にコメントを行う	グループ討論：1時間40分 プレゼンテーション：2時間半（討論まとめ、講評、交流合宿に関するアンケート記入時間を含む）
自由時間(個)	なし(自発的で任意の交流)	グループ討論後の自由行動や宿泊施設見学など	緊急時の対応を除き、交流支援者の介入は特になし	自由行動：討論終了から就寝までの任意の時間 宿泊施設見学の時間：30分

な活動内容は、上述の多文化交流合宿に加え、新入留学生のためのウェルカムパーティー、文化祭の模擬店出店、日々のランチトークなどである。その他にも年度ごとに学内外において自発的な交流活動が行われている。

3.2. 調査・研究方法と対象者

調査・研究方法 研究1では、第11回多文化交流合宿時に実施されたアンケート（加賀美, 2013）の再集計・再分析を行った。アンケート項目は3項目で、項目内容は「多文化交流合宿の内容に関心をもてたか」「多文化交流合宿の内容に満足できたか」「他の参加者と仲良くなれたか」である。評定法には4段階評定を用いている。

研究2・研究3については、2013年2月、半構造化インタビューを実施し「多文化交流合宿における交流はどのようなものか」、「多文化交流合宿後の合宿参加者の日本人学生（留学生）との交流はどのようなものか」等について質問し、自由に語ってもらった。

その後、インタビュー内容について多文化交流合宿当時の交流についての語り（研究2）、多文化交流合宿後の交流についての語り（研究3）を留学生と日本人学生別に文字化し、KJ法図解化（A型）・叙述化（B型）（川喜田, 1986）を用いて分析した。

具体的な手続きとしては、まず、文字化したデータからラベルを作成し、類似性の高いラベルをセットにした。次に、グループの内容を反映する表札をつくり、グループ編成を行った。さらに、グループ間の相互関係を見出すため、グループ同士の空間配置を試行し、全体構造を図解化及び叙述化した。なお、研究3に関しては、リピーターの日本人学生は多文化交流合宿以前から留学生との交流があると回答したため、参加1回目の日本人学生とリピーターの日本人学生別に分析を行った。

対象者 研究1については、対象者は第11回多文化交流合宿に参加した日本人学生15名、留学生19名の計34名で、所属別人数は学部生 15名、日本語・日本文化研修留学生 3名、交換留学生 5名、学部研究生 11名、大学院生 2名である。また、留学生の出身国別人数は、中国12名、タイ 4名、韓国 2名、ニュージーランド 1名である。

研究2・研究3については第11回多文化交流合宿当時の合宿リーダーの学生に依頼し、メーリングリストにて対象者を募集した。なお、留学生の出身国が複数の場合、文化的背景等の影響要因を見極めるのが難しいと推測した。そこで、本研究では第11回多文化交流合宿の参加者において最多の人数を占めた中国人留学生（63%）に対象者を限定し、中国人留学生12名と日本人学生15名に調査協力を呼びかけ、中国人留学生・日本人学生の各5名から調査協力の承諾を得た（表2）。

中国人留学生は全員、合宿参加時に来日1か月程度で初参加であった。日本語能力については全員日常生活や大学生活において差し支えなく日本語が話せる日本語上級者であった。また、日本人学生との日常的な接触については日本語・日本文化研修留学生の場合、日本人学生との交流型の日本事情の授業などを通じた交流が時々あったが、学部研究生の場合はゼミで日本人学生と顔を合わせる程度でほとんどなかった。一方、日本人学生については参加1回目の学生（以下、1回目参加者）が2名、参加2回目のリピーター（以下、2回目参加者）の学生が3名であった。学部2年生の4名はグループリーダーを務めていた。留学生との交流機会については1回目参加者の2名は比較的少なく、2回目参加者の3名はTEAの活動や上述の交流型授業等を通じた留学生との交流が頻繁にあった。

表2. 対象者の属性

対象者	所属(学年)	年齢	日本滞在歴 (合宿参加時)	日本語能力	合宿参加回数	討論グループのリーダー	日本人学生(留学生)との 大学キャンパスにおける日常的交流	
中国人留学生 (5名)	A	日本語・日本文化 研修留学生	22	1か月	N 1	1回目	授業での交流が時々ある	
	B	日本語・日本文化 研修留学生	21	1か月	N 2	1回目	授業での交流が時々ある	
	C	学部研究生	24	1か月	N 1	1回目	ほとんどない	
	D	学部研究生	25	1か月	N 1	1回目	ほとんどない	
	E	学部研究生	23	1か月	N 1	1回目	ほとんどない	
日本人学生 (5名)	F	学部生(1年生)	19			1回目	×	ほとんどない
	G	学部生(2年生)	20			1回目	○	TEAの活動や授業などを通して時々ある
	H	学部生(2年生)	20			2回目	○	TEAの活動や授業などを通して多くある
	I	学部生(2年生)	22			2回目	○	TEAの活動や授業などを通して多くある
	J	学部生(2年生)	20			2回目	○	TEAの活動や授業などを通して多くある

4. 結果と考察

4.1. 2012年度第11回多文化交流合宿における教育的介入は留学生と日本人学生の友人形成にどのように効果があるか(研究1)

4.1.1. アンケートの結果

多文化交流合宿への関心 関心については、対象者のうち27名が「強く当てはまる」(79.4%)と回答し、7名が「やや当てはまる」(20.6%)と回答し、両者を合わせると全体の100%であった。このことから、参加者全体が概ね活動内容に関心を持って参加したことが示された。

多文化交流合宿への満足感 満足感については、対象者のうち30名が「強く当てはまる」(88.2%)と回答し、4名が「やや当てはまる」(11.8%)と回答し、両者を合わせると全体の100%であった。このことから、参加者全体が概ね高い満足感を持ったことが示された。

多文化交流合宿による参加者間の親密化 参加者間の親密化については、対象者のうち27名が「強く当てはまる」(79.4%)と回答し、7名が「やや当てはまる」(20.6%)と回答し、両者を合わせると全体の100%であった。このことから、参加者全体が概ね他の参加者との関係を親密化させていたことが示された。

4.1.2. 教育的介入の効果

以上のことから、参加者全体が多文化交流合宿に関心を持ち、満足感を得て、友人関係を親密化させていたことが示された。つまり、2012年度の多文化交流合宿においても、異文化間交流促進のための取組みとして教育的介入が有効に機能したと考えられる。

4.2. 2012年度第11回多文化交流合宿における留学生と日本人学生が友人形成に至る交流体験はどのようなものか。友人形成に至る交流体験の関連要因はどのようなものか(研究2)

4.2.1. 友人形成に関する交流体験について

インタビュー内容を分析した結果、全84例(中国人留学生41例・日本人学生43例)の語りが得られた。この84例を内容ごとに分類した結果、大グループ、中グループ、小グループに分かれた(図2)。大グループ

ブについては中国人留学生・日本人学生に共通して【参加者全体との交流】【討論グループ内の交流】【討論グループを超えた親密化】【個人間の交流】の4つがみられた。【参加者全体との交流】の中グループには中国人留学生と日本人学生に共通して〈ゲームとボディワークによる接近〉、中国人留学生のみに〈ゲームとボディワークによる一体感〉、日本人学生のみに〈ボディワークを通じた緊張緩和と接触〉がみられた。次に、【討論グループ内の交流】の中グループには中国人留学生のみに〈グループメンバーとの共同作業による親密化〉および〈グループメンバーとの相互理解〉がみられ、日本人学生のみに〈異文化間交流の楽しさや学び〉および〈親密なコミュニケーションによる交流〉がみられた。さらに、【討論グループを超えた親密化】の中グループには中国人留学生と日本人学生に共通して〈自発的に集まったグループでの交流による親密化〉がみられた。また、【個人間の交流】の中グループには中国人留学生と日本人学生に共通して〈相互の自己開示〉、中国人留学生のみに〈偶発的出来事を通じた親密化〉がみられた。

4.2.2. 友人形成に至る交流の過程について

次に、友人形成に関する交流体験のグループ間の関連について検討したところ、友人形成に至る交流の過程が存在することが示唆された(図3)。その特徴として、第一に中国人留学生と日本人学生ともに全体から個別の交流に至る過程があることが考えられる。具体的には、【参加者全体との交流】から【討論グループ内の交流】、【個人間の交流】へと至っている。まず、全体での交流としてゲームやボディワークにより緊張が緩和され参加者間の心身の距離が近づき、交流が促進されている。例えば日本人学生Fは「ボディワークはいろんな人と会話できて楽しかった」と語り、参加者同士が交流しやすい雰囲気作りがなされていた。グループ討論では、グループ内の交流が活性化されている。例えば中国人留学生Dは「グループのメンバー同士でお互いに手伝えることを考えながら発表の準備をした」と語っている。討論後は個人間の交流によりさらに関係が親密になっている。例えば日本人学生Iは「中国の歴史について話すのはタブーだと思っていたが留学生と色々話せた」と語り、日頃大学で話題にしない内容について自己開示していた。

第二に、全体から個別の交流に至る過程において中国人留学生と日本人学生の両者に【討論グループを超えた親密化】の段階があり、この段階を経ることで関係性がより深まる可能性が示唆された。例えば中国人留学生Eは「討論後、皆で集まり自分の恋人のことについて夜遅くまで話した」と語り、グループ討論後、参加者同士の自発的なコミュニティが形成されていた。以上より、多文化交流合宿において友人形成に至る交流体験の過程は全体レベルの交流から個人レベルの交流へと移行する構造を持つこと、その中間段階として自発的コミュニティが形成されることが示唆された。

それでは、友人形成に至る交流体験の過程に関連する要因にはどのようなものがあるのだろうか。その関連要因として、2回目参加者の日本人学生の存在が大きかったと考えられる。なぜなら先述の自発的コミュニティの形成には2回目参加者の日本人学生の働きかけが寄与していることが示されたからである。例えば2回目参加者の日本人学生Hは「友達と友達をつなぐみたいな感じ。去年は自分がくっつけられる側だったが今年は仲介役に回れた」と語り、交流のコーディネーターとしての役割を自発的に担い、交流の場をセッティングしていた。

なぜ2回目参加者の日本人学生はコーディネーターの役割を担うことができたのかということについては、2回目参加者の日本人学生は過去の合宿参加や自身の異文化間交流の経験から、他の参加者の交流をサポートしたい気持ちを持つようになっていたためだと考えられる。例えば日本人学生Jは「1回目は楽しく留学生の友人を作るために参加したが2回目は合宿をセッティングする側として参加した」と語って

中国人留学生(41)

参加者全体との交流(8)

- ゲームとボドワイークによる接近(5)
- ゲーム時の参加者同士の接近(3)
- ボドワイーク時の参加者同士の接近(2)

- ゲームとボドワイークによる一体感(3)
- ゲームによる参加者間の一体感(2)
- ボドワイークによる参加者間の一体感

グループ討論での交流(11)

- グループメンバーとの共同作業による親密化(4)
- 発表の準備を一緒に行うことによる親密化(2)
- 討論の際のチームワークの形成による親密化(2)

- グループメンバーとの相互理解(4)
- 討論の際のグループメンバー間の相互サポート(2)
- 討論の際のグループメンバー間の相互理解(2)
- 討論を遊覧した自由なコミュニケーションによる親密化(3)

自発的コミュニケーションにおける親密化(10)

- 自発的に集まったグループでの交流による親密化(9)
- 複数のグループで集まりおしゃべりやゲームをしたこと(4)
- ゲームを通じた討論のグループを超えた親密化(2)
- 同室以外の友人と集まってくる交流(3)
- TEAの日本人学生が働きかけて他の討論のグループの人と交流できたこと

参加者全体との交流(12)

- ゲームとボドワイークによる接近(4)
- ゲーム時の参加者との接近(3)
- ボドワイーク後の参加者との接近
- ボドワイークを通じた緊張緩和と接触(8)

- ボドワイークによる緊張緩和(3)
- ボドワイークでの参加者全員との接触(4)
- ボドワイークでみんなと同じ感覚を味わったこと

個人間の交流(18)

- 相互の自己開示(10)
- 同室の日本人学生との文化や政治についての自己開示(4)
- 同室の日本人学生との家族や恋人についての自己開示(3)
- 積極的なコミュニケーションによる意思疎通(2)
- 同室の日本人学生との大学生活についての自己開示

- 偶発的出来事を通じた親密化(8)
- 偶発的に生じた困難への対処のための協働を通じた親密化(3)
- 食事の際の偶発的出来事による親密化(2)
- 偶然バスで隣に座った日本人学生との会話(2)
- 日本人学生と一緒に建物を見て回って冒険したこと

日本人学生(45)

個人間の交流(18)

- 相互の自己開示(17)
- 同室の留学生との家族や恋人についての自己開示(6)
- 大学生活上の対人関係についての本音の吐露(4)
- 同室の留学生との中国の歴史についての自己開示(3)
- 同室の留学生との文化や政治についての自己開示(2)
- 同室の留学生との日常生活についての自己開示(2)
- 共同浴場と一緒に行き、お互い慣れない中で文化について話したこと

図の見方

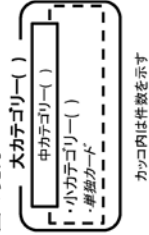


図2. 中国人留学生と日本人学生の友人形成に関する交流体験

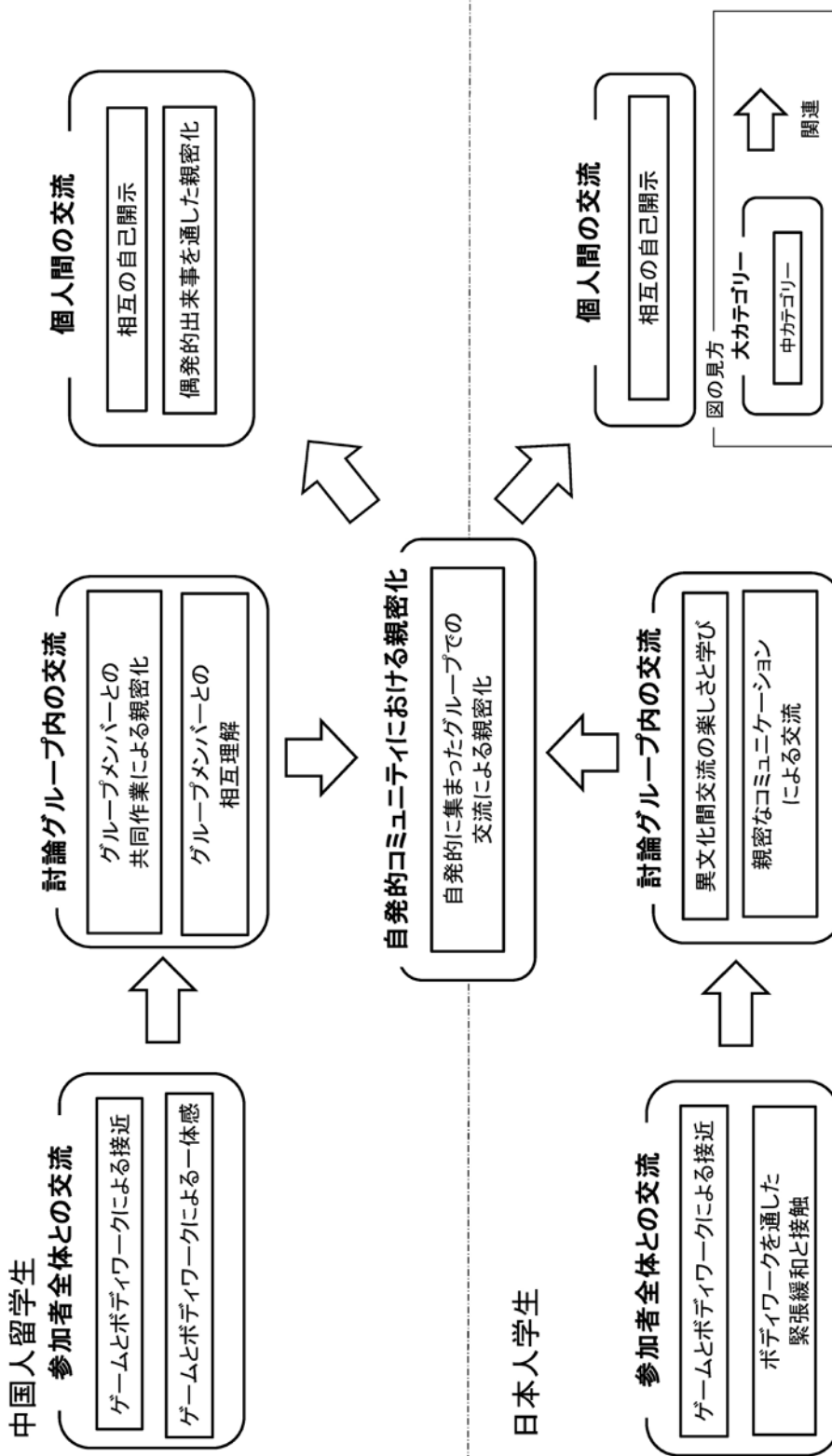


図3. 中国人留学生と日本人学生の友人形成に至る交流過程

いる。先述の加賀美(2006a)の調査では第1回多文化交流合宿初年度の参加者を対象としているため多文化交流合宿に複数回参加しているリピーターの役割については検討されていない。そのため、2回目参加者の日本人学生の役割は、本研究で新たに得られた知見である。

4.3. 第11回多文化交流合宿の3か月後、留学生と日本人学生の交流は継続しているか。継続する場合、関連要因はどのようなものか(研究3)

4.3.1. 多文化交流合宿後の交流について

インタビュー内容を分析した結果、全67例(中国人留学生24例・日本人学生43例)の語りが得られた。この67例を内容ごとに分類した結果、大グループ、中グループ、小グループに分かれた(図4)。大カテゴリーには【合宿後の交流継続】【合宿後の交流不全】【合宿以前からの交流】の3つがみられた。【合宿後の交流継続】は中国人留学生・1回目参加者及び2回目参加者の日本人学生に共通してみられた。【合宿後の交流不全】は留学生と1回目参加者の日本人学生に共通してみられた。【合宿以前からの交流】は2回目参加者の日本人学生のみのみみられた。

【合宿後の交流継続】の大グループについて、中国人留学生では中グループの〈学外での交流〉〈学内での気軽な交流の成立感〉〈TEAの活動を通じた交流〉〈SNS・メールを通じた交流〉がみられた。日本人学生(1回目参加者)では中グループの〈学内での気軽な交流の成立感〉〈交流機会の増加〉〈SNS・メールを通じた交流〉がみられた。また、日本人学生(2回目参加者)では中グループの〈合宿による交流の輪の拡大〉がみられた。【合宿後の交流不全】の大グループについて、中国人留学生では中グループの〈SNS・メールを通じた交流の不成立感〉〈学内での気軽な交流の不成立感〉〈接触機会の少なさ〉がみられた。また、日本人学生(1回目参加者)では中グループの〈学内での気軽な交流の不成立感〉〈接触機会の少なさ〉がみられた。さらに、【合宿以前からの交流】の大グループについて、中グループの〈TEAの活動での交流〉〈TEAの活動・授業・寮などでの多面的交流〉〈留学生の帰国後の交流〉〈SNS・メールを通じた交流〉〈留学生のサポートや相互支援〉がみられた。

4.3.2. 多文化交流合宿後の交流継続と交流不全について

多文化交流合宿後の交流の継続について分析したところ、中国人留学生と1回目参加者の日本人学生の2者と、2回目参加者の日本人学生の間で異なる傾向があることが示唆された。まず、中国人留学生と1回目参加者の日本人学生には共通して【合宿後の交流継続】と【合宿後の交流不全】の2つの大グループがみられた。前者の【合宿後の交流継続】には中グループの〈学内での気軽な交流の成立感〉がみられ、多文化交流合宿によって芽生えたメンバーシップが保持され、キャンパスで気軽に挨拶をしたり共に食事したりする関係が継続されている。例えば中国人留学生Aは「多文化交流合宿に参加する前は、日本人学生と接する機会は少なかったが、今は友人になった日本人学生と気軽に昼食を食べることができる」と語っている。また、日本人学生Gは所属している学部・学科に留学生が少ないため、日頃の接触機会がほとんどない。Gは「合宿の参加者と大学で会った際に話うれしかった。これからも少しでも話せたらいいと思う」と語っており、留学生とコミュニケーションがとれるようになったことに満足感を得ている。つまり、多文化交流合宿後、留学生と日本人学生の日常的な接触機会が増え、学内で交流できるようになったことに肯定的な認識を持っていると考えられる。

その一方で、中国人留学生と1回目参加者の日本人学生に共通してみられた【合宿後の交流不全】には中グループの〈学内での気軽な交流の不成立感〉が含まれる。例えば中国人留学生Bは「合宿参加者とは

大学で会ったときに挨拶するくらい。仲良くしたいがみんなと会う機会がない」と述べている。また、日本人学生Fは「グループの子とTEAの教室で会えない。これからどうやって（友情を）発展させていけばよいかわからない」と語っている。つまり、中国人留学生と1回目参加者の日本人学生は多文化交流合宿後、〈接触機会の少なさ〉に不満を持ち、キャンパスで挨拶をかわす程度にしか友人関係が発展していないと感じ、残念に思っている。

2回目参加者の日本人学生の場合は、中国人留学生・1回目参加者の日本人学生と同様に【合宿後の交流継続】が抽出されたが、【合宿後の交流不全】は抽出されなかった。例えば日本人学生Hは「合宿で友人になった留学生とはTEAの活動を通して気軽に交流している」と語っている。つまり、多文化交流合宿により新たな友人を獲得し、その友人たちとの関係が継続していることが示された。以上より、中国人留学生と1回目参加者の日本人学生については多文化交流合宿後の交流の継続は限定的である傾向、2回目参加者の日本人学生については交流が継続している傾向が示唆された。

それでは、交流の継続に関連する要因にはどのようなものがあるのだろうか。その関連要因として、研究2と同様に、2回目参加者の日本人学生の存在が大きかったと考えられる。2回目参加者の日本人学生の場合、中国人留学生・1回目参加者の日本人学生と異なり【合宿以前からの交流】が抽出された。2回目参加者の日本人学生は〈TEAの活動での交流〉や〈TEA・授業・国際宿舎などでの多面的交流〉により友人関係を深めている。例えば日本人学生Jは「TEAの活動が留学生との交流のきっかけになり、寮(国際宿舎)でも交流するようになった」と語っている。また、日本人学生Iは「毎日昼休みはTEAの教室に行き、留学生と友だちになれた。その留学生たちとは授業のグループワークで協力し合い絆を深めている」と語っている。つまり、2回目参加者の日本人学生はTEAでの交流活動を基軸とし、留学生と日本人学生の交流型の授業、両者が居住する国際宿舎等の異文化間交流のための様々な制度的支援を積極的に活用し、友人関係を持続させていると考えられる。

さらに、TEAの活動の一環として多文化交流合宿に参加することで【合宿後の交流継続】が付加され、〈合宿による交流の輪の拡大〉が生じている。例えば、日本人学生Iは「(多文化交流合宿の後で自分を介して)日本人学生-留学生の交流という新しい線が生まれ、うれしかった」と語っており、多文化交流合宿後も、参加者間の交流を自然に促している。以上より、2回目参加者の日本人学生は多文化交流合宿により新たに得た友人との関係を深めつつ、周囲の留学生や日本人学生の交流を促進する仲介役となっていることが示唆された。

5. 総合的考察

以下では、1) 多文化交流合宿が留学生と日本人学生の友人形成にもたらす効果、2) 交流のコーディネーターの役割を果たす日本人学生の存在、3) 留学生と日本人学生の交流を促す大学側の支援に着目して考察を行う。

5.1. 多文化交流合宿が留学生と日本人学生の友人形成にもたらす効果

研究1より、2012年度多文化交流合宿における教育的介入が留学生と日本人学生の友人形成を促進させる効果を持つことが示唆された。また、多文化交流合宿は参加者全体レベルの交流から集団レベルの交流、個人レベルの交流へと至るようにプログラムされており、研究2の結果より、概ねこの流れに沿って友人形成がなされている傾向が明らかになった。本研究の対象者である中国人留学生は、多文化交流合宿

中国人留学生(24)

合宿後の交流継続(16)

学外での交流(5)

- ・合宿参加者同士で遊びに行ったこと(4)
- ・合宿参加者同士での食事や外出

学内での気軽な交流の成立感(4)

- ・キャンパスで会った際に挨拶ができる(2)
- ・一緒に食事ができる(2)

TEAの活動を通じた交流(3)

- ・TEAのランチトークを通しての交流(2)
- ・TEAのイベントを通しての交流

SNS・メールを通して交流(2)

SNSを通して交流
メールを通して交流
交流型授業での交流
さらなる親密化希求

合宿後の交流不全(8)

SNS・メールを通して交流の不成立(3)

- ・メールでの交流の不成立感(2)
- SNS・メールを通して交流不継続

学内での気軽な交流の不成立感(2)

大学で挨拶する程度の付き合い
合宿の時だけの交流であった

接触機会の少なさ(2)

TEAの活動になかなか参加できないこと
日本人学生と接点がなく会えないこと
自身の積極性の欠如による交流の不継続

日本人学生(1回目参加者)(18)

合宿後の交流継続(10)

学内での気軽な交流の成立感(5)

- ・キャンパスで会った際に挨拶ができること(2)
- ・キャンパスで時々話ができること(2)
- ・キャンパスで会ったときに時々交流できること

交流機会の増加(2)

留学生との交流機会の増加
TEAのメンバーとの交流機会の増加

SNS・メールを通して交流(2)

TEAのランチトークを通して交流

合宿後の交流不全(8)

学内での気軽な交流の不成立感(2)

挨拶程度の付き合い日本人学生と接点がなく会えないこと
留学生とは一緒にTEAの部屋で食事するくらいしかできないこと

接触機会の少なさ(4)

- ・TEAの活動になかなか参加できないこと(2)
- グループメンバーがTEAの活動に参加していないこと
- グループメンバーと会うきっかけが少ない

SNS・メールを通して交流の不成立
自身の積極性の欠如による交流の不継続

図の見方

大カテゴリ()

中カテゴリ()

小カテゴリ()

単語カード

カッコ内は件数を示す

日本人学生(2回目参加者)(26)

合宿後の交流継続(6)

- ・合宿による交流の輪の拡大(4)
- ・合宿による新たな友人の獲得(2)
- ・自身がつなぎ役となり合宿参加者同士が友人になること(2)

学内での気軽な交流の成立
留学生側の積極性による友人形成

合宿以前からの交流(20)

TEAの活動での交流(7)

- ・TEAのランチトークを通しての交流(2)
- ・TEAのイベントを通しての交流(2)
- ・TEAの活動への積極的参加による交流(3)

TEA・授業・国際宿舎などでの多面的交流(5)

- ・TEAの活動や授業での交流(2)
- ・TEAのランチトークや授業での交流を通して親密化(2)
- ・交流型授業での交流

留学生の帰国後の交流(3)

- ・帰国した留学生とのSNSを通じた交流(2)
- ・帰国した留学生との手紙などを通じた交流

SNS・メールを通して交流(2)

ラインやスカイプを通して交流
フェイスブックを通して交流

留学生のサポートや相互支援(2)

留学生の課題のサポート
留学生との相互支援
学外での交流

図 4. 多文化交流合宿 3 ヶ月後の交流について

に参加した際来日初期であったため、異文化適応や異文化間コンフリクトに関する不安（小松，2012）が高い状態にあったと考えられる。しかし、プログラムの進行に伴い中国人留学生の不安は低減され、異文化間の友人形成が促進されていた。また、横田（1991b）は、日本人学生は留学生との友人形成初期の緊張が高い傾向にあり、緊張低減のために集団活動への参加が重要だと述べている。つまり、留学生と1回目参加者の日本人学生の双方にとって、友人形成を始動させるために多文化交流合宿における全体・集団レベルの交流から個人レベルの交流へと至る道付けが必要であったと考えられる。

さらに、教育的介入には安全で保護された異文化接触体験の保証や望ましくない接触の制御（加賀美，2006a）の効果がある。その効果が多文化交流合宿のプログラム化された活動において発揮されていたため、友人形成が促進されていた。また、プログラム化された活動のみではなく、討論後の自由時間においても友人形成は促進されていた。これは多文化交流合宿が一泊二日の宿泊形式であることからプログラム外にも自由な交流や偶発的な交流が生じやすいためだと考えられる。本研究で述べたグループ討論後の自発的な集まり以外にも、たまたまバスの隣の席に座った学生が自分の話に一生懸命耳を傾けてくれたこと、宿泊施設の様々な場所を同じグループの参加者と2人きりで一緒に見学し小さな冒険のように感じたことなど、各々の留学生・日本人学生が自分自身しか体験し得なかった独特の交流体験について語っていた。

プログラム化された活動は安全な異文化接触を保証するが、その活動のみでは公的で受動的な交流から発展しにくいと考えられる。しかし、多文化交流合宿ではプログラムされていない活動がいろいろな場面で自然に生じ、私的な交流がなされるため、友人ができたという認識を持つことができるのだと考えられる。

ただし、研究3では、多文化交流合宿後の参加者間の交流の継続が限定的であることも示唆された。なぜ、交流が継続しない場合があるのかということについては、中国人留学生と参加1回目の日本人学生の語りでは、自身の態度が積極的でないから、友人になった相手がTEAの交流活動に参加しないから、日本人学生と交流したくても所属する中国人留学生のコミュニティを離れられないからなどの語りがみられた。つまり、多文化交流合宿後の交流が継続しない場合、参加者の積極性や努力の有無が関連していると推察できる。

5.2. 交流コーディネーターの役割を果たす日本人学生の存在

研究2・研究3の結果より、2回目参加者の日本人学生は多文化交流合宿及びその後の参加者間の交流促進の役割を持つ傾向が示唆された。2回目参加者の日本人学生は留学生と日常的に交流しており、多文化交流合宿の計画・準備についてはTEAの活動の一環として積極的に行っていた。また、日頃より積極的に交流活動を行うことで自然に留学生と日本人学生が安心して交流ができる「居場所づくり」をしていたのだと考えられる。つまり、留学生と日本人学生の友人形成促進のためには、教育的介入等のプログラム設定のみではなく、日常的な交流の核となる存在が必要であり、本研究では、多文化交流合宿2回目参加者の日本人学生がその役割を担っていたと考えられる。

5.3. 留学生と日本人学生の交流を促す大学側の支援

本研究の結果から、大学側が留学生と日本人学生の交流促進のために提供すべき支援として第一に長期的・継続的な支援が挙げられる。本研究では2回目参加者の日本人学生が交流のコーディネーターやサポートの役割を果たすことが明らかになったが、こうした学生を育成するためには、多文化交流合宿や国際交流グループの活動を途絶えさせないことが重要である。

第二に、留学生コミュニティと日本人学生コミュニティの接点を大学内の様々な場所に設定していくこ

とが重要だと考えられる。多文化交流合宿後も交流が継続している場合、日本人学生も留学生もTEAの活動等の様々な制度的支援を活用していた。つまり、多文化交流合宿後も大学キャンパスにおいて交流機会が保障されることにより、交流が継続されると考えられる。

しかし、本研究では大学側が制度的支援を行っていても学生側が積極的に支援を生かすことができなければ友人形成は促進されないという側面も垣間見えた。これは、日本人学生も留学生も勉学、研究、アルバイト、留学、就職、その他の人間関係等、様々な事に関心を持っているため、常に多文化間の友人形成に注力できるわけではないことが背景にあると考えられる。このような学生同士の交流の不安定要素を補うためには、大学側に集団レベルの交流を促進するような全学的な取り組みや、さらなる工夫が必要とされていると考えられる。

最後に、本研究の限界は多文化交流合宿参加者のうちの限定された対象者の分析を中心としているため過度な一般化はできないことである。今後は調査協力者をさらに増やし、交流が継続する過程と継続しない過程について縦断的な調査を行いたい。

参考文献

- Allport, G. W. (1954) *The Nature of Prejudice*. Reading, MA:Adison-Wesley.
- Brislin, R. W. (1981) *Cross-cultural encounters:Face-to-face interaction*, New York, NY, Pergamon Press, 72-108
- Eller, A・Abrams, D・Zimmermann, A (2011) *Two degrees of separation:A longitudinal study of actual and perceived extended international contact*, *Grourocesses Intergroup Relations*. 14, 175-191
- 藤井桂子・門倉正美 (2004) 「留学生は何に困難を感じているか：2003年度前期アンケート調査から」『横浜国立大学留学生センター紀要』11, 113-137
- 加賀美常美代 (2001) 「留学生と日本人学生のための異文化間交流の教育的介入の意義－大学内及び地域社会へ向けた異文化理解講座の企画と実践－」『三重大学留学生センター紀要』3, 41-53
- 加賀美常美代 (2006a) 「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか：シミュレーションゲームと協働的活動の場合」『異文化間教育』24, 76-91
- 加賀美常美代 (2006b) 「大学における異文化間コミュニケーション教育と多文化間交流」『日本研究 (高麗大学校日本学センター)』6, 107-135
- 加賀美常美代 (2007) 「大学キャンパスにおけるコミュニティ・アプローチによる留学生支援」『臨床心理地域援助特論』放送大学教育振興会, 161-178
- 加賀美常美代 (2013) 「10. 第11回国際教育交流シンポジウムを振り返って」(2013)『第11回留学生と日本人学生のための国際教育交流シンポジウム報告書』富田裕香・岩崎未来・吉澤真由美・徳田かおり編, お茶の水女子大学グローバル教育センター, 53-54
- 加賀美常美代・小松翠 (2013) 「11. 大学キャンパスにおける共生」『多文化共生論—多様性理解のためのヒントとレッスン』加賀美常美代編, 明石出版, 265-289
- 神谷順子・中川かず子 (2002) 「日本人大学生の異文化接触に関する研究 留学生との接触経験による意識変容について」『学園論集』111, 127-147
- 木村真人・水野治久 (2004) 「大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて—」『カウンセリング研究』37, 260-269
- 木村玉己・中込美賀子 (2003) 「中国人留学生と日本人留学生にみる行動認知差分析」『千葉大学教育学部研究紀要』51, 285-288
- 川喜田二郎 (1986) 「KJ法 混沌をして語らしめる」中央公論社

留学生と日本人学生の友人形成に至る交流体験とはどのようなものか

- 小松翠 (2013) 「国際交流グループTEAの活動は異文化間の友人形成にどのような影響を与えるか」『コミュニティ心理学研究』 17(1), 67-71
- 小松由美 (2012) 「国費学部留学生の留学初期における期待と不安について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 38, 89-95
- 中川かず子・神谷順子 (2000) 「大学生の教育・生活に関する態度と価値観, 並びに大学教育に対する適応 異文化接触が大学教育適応に与える効果」『学園論集』 106, 33-49
- 中野はるみ (2006) 「異文化教育における留学生の役割」『長崎国際大学論叢』 6, 55-64
- 日本学生支援機構 (2013) 「平成25年度外国人留学生在籍状況調査結果」 http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data13.html (最終閲覧日: 2014年 9月 6日)
- Pettigrew, F.(1998) *Intergroup Contact Theory*, Annual Review of Psychology. 49, 65-85
- Pettigrew, F.,・Tropp, R. (2006) *Meta-Analytic Test of Intergroup Contact Theory*, Personality & Social Psychology. 90, 751-783
- 戦旭風 (2007) 「友人との付き合い方から見る中国人留学生と日本人学生の友人関係」『留学生教育』 12, 95-105
- 園田智子 (2011) 「短期交換留学生の異文化適応に関する調査報告: 主観的適応感と関連要因を探る」『留学生交流・指導研究』 14, 75-85
- 高木浩人 (2007) 「大学生の自己開示と孤独感の関係: 開示者の性別, 開示相手, 開示側面の検討」『愛知学院大学論叢 心身科学部紀要』 2, 53-59
- 坪井健 (1999) 「留学生と日本人学生の交流教育—オーストラリアとの比較を通して—特集 留学生支援システムの最前線」『異文化間教育』 13, 60-74
- Wright, S.C.・Aron, A・McLaughlin-Volpe, T(1997) *The extended contact effect: Knowledge of cross-group friendships and prejudice*, Journal of Personality and Social Psychology. 73, 73-90
- 横田雅弘 (1991a) 「自己開示からみた留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』 105 (5), 57-75
- 横田雅弘 (1991b) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』 5, 81-97
- 横田雅弘 (2013) 「第7章 日本人学生の国際志向性」横田雅弘・小林明編『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』 157-178